

昭和三十四年四月十五日第三種郵便物認可
昭和三十五年四月十五日發行
(每月一回、十五日發行)

(通第一三三三號)

慈光

第十二卷 第四號

目次

宿業論(歎異抄第十三章)(三)	近角常觀……(1)
善知識を訪ねて……	福島政雄……(7)
信謗共に因となりて……	花田正夫……(15)
正信偈私解(十六)……	白井成允……(18)

十一 聖人はお慈悲をお知らせ下さるに於てからが。

そこになると、第一、この信仰のことを人にお説き下さるに於てからが、我々聖人には、人に信仰を得させる獨特の技量でもあられたかに思うのであるけれども、聖人には人に信仰を得させるなど思われた氣振りをすらい。『歎異鈔』六章には

親鸞は弟子一人もたず候。そのゆえはわがはからいに、ひとに念仏をもうさせそうらわばこそ、弟子にてもそうらわめ。ひとえに弥陀のおんもよおしにあずかりて念仏申し候うひとを、わが弟子と申すこと、きわめたる荒涼のことなり。つくべき縁あらばともない、はなるべき縁あればはなることのあるをも師をそむきてひとつれて念仏すれば、往生すべからざるものなりなどいうこと不可説なり。如來よりたまわりたる信心を、わがものがおにとりかえさんと申すにや。かえすもあるべからざることなり。自然のことわりにあいかなわ

ば、仏恩をも知り、また師の恩をもしるべきなりと云々。実に思い切り、書いておしまひになつてある。全体親鸞につきて法を聞くと、又捨てて去ると「つくべき縁あれば伴い、離るべき縁あれば離るることのあるをも」である。しかるにそれを皆が、師によりて安心させて貰つて居りながら、師に背きて去るは濟まぬ、などというのであるけれども、第一、かく、親鸞が信仰を得させたと思つて居るのが根本的の間違ひだ、而してこれが決して謙遜の言葉でなく、現に、善鸞上人が聞き違えがあつたとすれば、縁なきところには自分の御子様にすら、お届けになることが出来なかつたのである。しかるに我々は、わが思う如くに伝えよう、わが親、子、兄弟に、自分の力で誰彼にもと思つのであるけれども、それは如何程思うても思う如くにはなり得ぬこととなるのである。

十二 業とは自分自身の業とのことなり。すると斯く我々の何もかも皆業報で、

思うようにならぬだけしまいかというに、否、かく我々が業報につながれ、電車道に横たわりて動けない様であるが可哀想と、そこを見て下されたのである上は、
『いや業報だからそこに何時までも倒れて居なくてはならぬぞ、動こうと思つたらいかぬ、退こうと思つたら身の程知らずだ』

と、そこに、かれこれ、善し悪し言われることではないのである。むしろ
『動かな助からぬ身であるのに動けぬとは可哀想と、そこを見てやつたのである上は、その汝をどこまでも見捨てはしはせぬぞ』

と、我々のあたりまえの善悪、善し悪しの所作が、残らず業報であることを哀れみ、見て下されたお慈悲ゆえ、このたびは何処までもその者に、我々の善悪をかけ離れ、善し悪しを飛び越えた御真実で、お向かい下さるとなるのである。

併しここはうつかり聞き違えて、
『それだから我々の善悪は、善悪どちらもよいのだ』
となつてはならぬ。善悪は何処までも肝腎な問題である。けれどもそのなさねばならぬ善悪が、我々その如く出来得ないということである。そこは我々自分が喰べられ、喰べられぬ位の話ならばまだよいのであるけれども、

実はしなければならぬが出来ぬのゆえ、借りた金なれば返さなければならぬの問題である。そこは我々は何処までも、義務をおうている。如何なる方法も取りて償わなければならぬが原則である。しかもその返さなければならぬのが、事實は返し得ないという問題である。するとどうなるか。

『返せない』と『返さない』とは大違ひである。何うも近頃の人の云う善悪超絶は、
『出来ないのだからしない』になりて居はせぬか。返すべきを返さずして『返せぬのだから返さなくてもよいのだ』では意味をなさぬ。

ところが今、他力は何程返そうにも、返し得ない我々なることを見てくる人ありて『君。何はすてもこの義理立てねばと苦しまるるのである。それが返されぬので困つて居らるのである。それを見た上は、君の返し得ぬが氣の毒……』と。
何うもここで従来とかく『イヤ返さないけれども、これが業故、返さなくてもよいのだ』と、これになりてこまるのである。それではひとごとになりて、自分自身の業にならぬ。自分を離れての業になりて、それなら『自分の性分ゆえ、せんとこと思つても、ひとりで出来てもた』流儀である。

ゆえにここは大事である。兎角私が、『思うようになら
ないのだ』という、聞く人が『ウン、それを我々思うよ
うにしようと思うて居るのが間違いだ』と、

これが甚だいかぬのである。『思うようにならぬ』と、
『いかぬ』というたとして、

人間が思いを引込めることが出来ずか。我々が死ぬ時、
死ぬのをいやと思わぬとおかうと思つたとて。それは出来
ることでない。すると返すべきが返せないとなれば、唯々
苦しい一方である。

しかるに、それを見て呉れた人は『それは成程、返さな
くてはいかぬが原則である。けれどもそのせねばならぬが
出来ぬとは、さてさて気の毒である。ゆえに我はそこをど
こまでも見てやるぞ』と、
ここで広大な御同情が現われて下されたとなるのである。

十三 眞の同情とは

ところでかく『思うようにならぬを見て下さる御同情
だ』と私が申し上げると、兎角聞いて下さる方であらるる
同情の意味が、私が言うのと違つて来て困るのである。そ
れはどうしても同情だといわれると、人間の頭に出て来る
は、自分の思惑通りに助力して呉れる、世間的同情の意味
になる。たとえば私が長生きしたい。すると私の思いを察
して、長生き出来る方に努力してくれるが同情ということ

になる。それなら、
私から云うと同情にならぬのである。眞の同情とは、返す
べきを私が返されぬとすれば、そういう不届きな奴は相手
にせぬとあるべきに、

『それは汝が返されず、隔ての止まぬのが性格である。
その性格を気の毒という以上は、汝が如何に隔てようが、
抵抗しようが、それを一点自分は悪くは思わぬ。益々同
情する』

と普通ならば、どんなにこちらが並べ立て、
『いやそんな奴、相手にせぬ』
とあるべきところに

『イヤ君のそうなる処に同情するのだもの、そうならば
なる程、いよ／＼気の毒とこそ同情すれ、一点悪くは
斥けぬ』

とこうありてこそ、これが同情である。即ち
信仰味の一番大切な一点はここである。ところが甚だ分り
難いところで、色々に間違つて困るのである。最も間違ひ
易いのは、元來、

同情とは精神的のことなのである。そこになると全体、信
仰問題とは精神上の問題。そこは仏のお慈悲にしても、心
光と申して、心の上のことである。それを何か、
外界に光でも見ることの如く考える。早い話が我々が死ぬ

となると暗である。するとその暗黒を照らす光というと、
何かそこへ光でも来て、明るくなることのように考える。
成る程、照らすという言葉はあるも、それは心の上の形容
である。それを兎角、外界に何か頼られでもするかの如く
に取りていかぬのである。

十四 私の行き詰つたのは、

そこはいつものことであるも、私など初めの問題は、『
人と融け度い、人を不足に思わぬようになれるとよい』と
これを望んだのである。処がいつまでいつてもそうならな
かつたのである。これは真面目な方ほどこの苦しみがあら
れようと思ふ。何故なら、
外界というものは常に自分を理解してくれるもので無い故
に、どうしても人が不足に思え、隔てが起ることになつて
来る。すると『その如く、人を悪く思い、隔てているの
がいかぬゆえ、此方からはどこまでもよく』と、私などこ
れに止つたことが半年以上にわたつたのである。

ところが何処までいつても之がいかぬことになつてしま
つたのである。それはよくしたればしたで『自分がした』
というものが残り、譲つて遠慮すればするで矢張り『自分
がした』となる。即ちいつまでいつても、
この自分というものが善くならぬ故、最後には善くしよう
という考を断念せなければならぬことになつてしまつたの

金魚の
一品種

ラン生所

である。即ちさきの聖人が『一分一厘善くなせぬ』と知ら
せて下されたがここである。

当時そのことが私の心にひびいて思つたことである。
『これはあくまで自分の心の自由ということが失われて
ある。まるで、
黒板上に丸子が置かれてある状である。一寸一点力が加え
られると動き出すことは分つてあるが、その一点がどうし
てもいかぬ。』

『人が何程自分を悪く思おうと、自分よりは思うまい』
……これ一つが出来れば、あとは転々と、自由に動き出す
ことは分つてあるも、その一つの力が与えられぬから、何
うしてもいかぬ』と。それでとうとう人に融けようとするこ
とを断念するより仕方がなくなつてしまつたのである。す
るともうしかたがない、自分はどこまでも人に隔て、不足
ばかり。今まで力を入れて来た自分の宗教上の仕事も、す
べて水泡に帰し、

『もう自分は自滅するばかり』との考より外になくなつて
しまつたのである。処が私自身は自滅しても、
心が死にきれない。最後に『自分はこれまで努力して、終
に駄目になつてしまつたのである。哀れ願わくば、自分が
これ程苦しみて善くなれない、そこを成る程、君のは、
それ程やつてもいけなかつたの故、……いけなかつたのは

いかぬと捨てずに、……君のいけなかつたのは察する、悪しくは思わぬ」と、もうこの時、

結果などを望みはせぬのである。「ただ、これほど自分はやつていけなかつたという、その汝の心淋しき心中が哀れと、そこを一滴の涙で見られるだけの慈悲者はあるまいか」と。もうここになるとそういう同情の恵みが欲しいばかり、そういう同情者があると、どうなれるかなどという結果などは思はせぬのである。ここで結果が眼につくのだと、私のいう意味は理解して貰えなくなる。そこは聖人の仰せにも

地獄におちたりとも、さらに後悔すべからず候。そのゆえは……いずれの行も及びがたき身なれば、とても地獄は一定すみかぞかし（歎異鈔二章）

地獄は一定すみかぞかし（歎異鈔二章）

掩土重来などいう、そういうものなくなりてもた処である。そして唯々「これほどやつてもいけなかつた。そこを見てくる者はあるまいか」と、一番最後に残つたものは、これだけのものになつてしまつたのである。

しかし、いよいよ最後に、初めて今まで聞いて居つた仏のめぐみなることは、実にこの御同情であつたことに氣附かして貰うた。

たい。併し、自分は死なぬものと決らぬから、それではどうしても安心されぬとなるのである。むしろそうあらしめ度いと思えば思う程、いよいよ安心がされぬのである。そこは如何に信仰は頂こうが、

いささか所勞（病）のこともあれば、死なんずるやらんと、こころほそくおほゆることも、煩惱の所為なり

と。歎異鈔にある如く、死ぬかと思えば矢張り、心淋しく、心細い。しかるにその心淋しい暗黒に同情して、……むしろ極言すれば、信仰を得たら心淋しくなくなるのだからと思つて居たに、

反対に信仰を頂いてもその心が止まぬ、そこを見て、「それはさぞ心淋しかろう、力なからう」と、そこへ遣る瀬なき慈悲で向わるものだから、

そこで方角が転ずるとなるのである。今までは自分が悪しくしていかぬと思つていたに、ここで方角一転して、「このように、どれだけ努めても悪しさの止まぬ、この止まぬ者故、この奴が哀れとあるお慈悲か！」と。でその時私は思つたのである。

『丁度、私の苦しみ悩みのある限り、そこへ丁度一杯に遣る瀬なき恵みで同情して下さる方が仏だ！』と。もう一つ極言なれども、

『仏の姿、形。そもそも仏とは、私共人生苦惱の鑄型の

それまで私は、仏のお慈悲は「悪しくてもよい」に聞いて居つたのだから、ここにいたるまで御真意を知らして貰うことが出来なかつたのである。

十五 方角轉換の一点

ところがどうも説教で、仏の本願は「悪しくてもよい」、「悪しきなりで」の意味に言われるもの故、大低の信者の方の聞き方が「悪しくてもよい」か、或はそれでは本當の安心にならぬもの故「悪しくてはすまぬ、善くせねばならぬ」の聞き方か、大低この二種類になりてある。そのそうなるは、

な自分でも動くことが出来る余地あるものになつて居るからそれになる。

ところが現に私の如く、ありてはならぬ私の悪しさが止まぬとなると、悪くてもよいでは安心出来ぬ。悪くても暗黒になる一方になる。

しかしどんなに苦心しても、その悪しさが取れぬとなると、この時「イヤ、我々は、その取れぬのを気の毒に思うのじゃ」とある慈悲者は、もうその者を何処までもお見捨て下さらぬ処の御同情である。

どうも話がちと緻密になり過ぎる恐れがあるが、設えは我々のさきより云う「今死んでは悪い。死なぬ様にした」となると、何処までもそうられるようにして安心し

中へ、その苦惱が哀れ／＼との大悲の溶液をつぎこみ、仕方のない私の全体へ、廣大の恵みをみちみて下さる方が仏だ」と、思つて貰うたことであつたのである。

十六 破闇満願

そこで皆様が、「仏とは如何」、「仏の存在はどうして確かめるか」すぐこれを聞きながら行われるのであるけれど、そも／＼仏とは、私共人生は様々なる業報、因縁、境遇、約束、様々なる私共の鑄型はあるが、その各の鑄型のさき／＼までも、今この御察し下さる真実が行き渡つて下されて、

その真実の塊なる方が仏である。もう私の兎の毛のさきさきまでも汲み取りて下されて、何処までも、その私をお見捨てなき御真実が仏だと。この仏が現われて下さらぬ限り満足の時はない。故に、

この仏が現われて下された時が破闇満願。如何なる私の闇はあるも、その闇のある限り、遣る瀬なく思召し、如何に私の闇にて妨げようとするも、こちらがそれがある限り、その闇を照らそうとの御真実故、即ち、

無明長夜の灯炬なり、智眼くらしとかなしむな、生死大海の船筏なり、罪障おもしとなげかされ。

しかし、照らされて、

明るくなることに目をつけてはならぬのである。むしろ私

の明るくならぬさき／＼までも見て下さる御実意である。
こは皆様が何か苦しきことであると、この苦しみのを信仰の力で苦しくなくなろうと思われると、却つて信仰の道でなくなつて来る。むしろ我々は苦しい、自分の力で、その苦を脱れようにも、脱れられぬになつて来るのである。そ

善知識を訪ねて

福 島 政 雄

の脱がられぬ苦しきを見て『苦しかり、悩ましかり』とある恵みである。故に我々の苦しきを、直にそれも恵みとすると間違ひになつてくるのである。

(未完)

病を癒す長者

そこで善財童子は更に心が深くなりまして、今の教えられた国に向つてまいります。そしてその長者に遭うて見るとその長者は香台座、かおりの台、よい匂のする台かも知れません。その上にいる長者を拜する、そうすると、その長者は昔文珠の所で医を学んだことを話すのであります。で「自分は病を治して後に説法してその心を調べて上げる」こう言うのであります。そこで今度は病気の種類を話すのであります。大体病気は四種類ある。身の病、心の病、それから客病かくびょうと言うのがある。俱有病くゆうびょうというのがある。体

の病気と言うのは、やれ風邪を引いた、熱がある、そういうのであり、心の病気とは所謂今日という精神病、客病と言うのは譬えば刀で斬られて怪我をしたとか、杖で打たれて痛むようになったとかそんなのやら、働き過ぎて疲れたとか、そんなのは客病と言う中にはいる。おしまいの俱有病というのは、腹が空いて堪らないとか喉が渴いて堪らないとかあるいは寒くてたまらない、暑くてたまらないと苦しんだり、楽しんだり、非常に心配したり喜んだりしている、それも俱有病という病気の中にはいる。そして一体病気というものは貧乏人には少ない、貧しい人はよく働

くから病気をすることは少い。富み榮えている人はあんなまじらくをし過ぎていから病気になる。こういう事を言うのであります。

これは、こういう所を御経で読みますとこんな事を感じますのであります。今年新年になりましてから、これはイスの国の聖者と言われておりますヒルティーと言う人、過去の人でありますが非常に立派な人であつたのであります。その人が書いたものがただ今ではあちこちの出版社から訳が出ておりますその一つ二つを読んで見ました。

先ず私が読んで見ましたのは、どうして私共は暇をつくる事が出来るかというような事や、我々の本当の幸福はどんなものであるかというような事を言われてあります。本当の幸福と言うのは、仕事があつてよくその仕事に精出す事が出来て、六日間働いて一日やすむ、昼間働いて夜やすむ、そう言う働きを続ける事が出来たらこれが一番の幸福で、その他の幸福というものはありはしない、と言う事を言われるのであります。これはキリスト教の人であります。又財産を沢山持つていて夏になるとスイスの山奥に身心の静養の為に出かけて来る連中が沢山ある。そう言う連中に限つて病気が多いのは決して本当の幸福でない。本当の幸福と言うのは、適当に働いて適当に休んで行くという事を続ける事が出来る、それが一番幸福だ、そんな事が

言つてある所にえらく感じましたのでありまして、夏温泉に入つてどうこうするとかそんな事は贅沢であつて、本当に働いて適当に休んで、又働いて適当に休んで行くところに人間の幸福があると、これが本当にいゝ事であるという事をしきりに感じましたのであります。それで今のようにこの御経を読みますとヒルティーの言つていゝ事と丁度同じような事が言つてあるし、これは本当であると感じました。

そこでこの御経には我々の体と言うものは五大より成ると今の長者が言うのであります。堅・湿・煖・動・空、この五大よりなるというのでありまして、堅と言つては骨なんかを言うのでありまして、湿とは体の中の血液を始め水分、煖は体温、そして動とは体の中の器管も動くわけでありまして、それから空というものは此処での意味はそう言うものによつて出来ているその間には隙間がある、そう言う意味らしいのであります。この堅・湿・煖・動・空の五大が和合して我々の体というものが出来ている。その五つの内の一つでも調わないと色々の病気が起つて来る。そして五つの時代の移り変りと言うものが人間の一生についてもある。人間の一生について言えば、赤ん坊の時、それから幼年時代の時、壮年時代、今度は老衰、それから至死、死ぬるようになる。この五つの時代を通つて行く。この一

切衆生の色々の病氣に苦しんでいるのを治す。その治しませすのに先ず最初に飲食物、其の人の欲しいというものを与え、それから後にその心を治すと言うのであります。これがまあ非常に大事な事でむづかしい事だと思ふのであります。その心を治すのに譬えば食欲の多い者には不淨觀を教えると言つてあります。この世の中と言うものは不淨、全く穢れていて清いものはないという事を先ず自分の体の上から、それからその他の者の上に感ぜしめる。そこをよくわからせるというのであります。それから憤志の強い者は慈悲觀を教える。よく腹を立てる者には慈悲の心を以て物を観る、人を観る、そこを教える。それから愚痴の多い者には色々の物の相を分別してそれぞれの物がわかるようにしてやつて、その愚痴の心を治させると言うのであります。兎に角こういう風にして色々の煩惱を断ち切る。お医者さんと言うのはこう言うのが本当でありましょう。

こういう事を聞くのであります。科学は人間を物として扱う。それから宗教は人間を神として扱う。唯文芸は人間を人として扱う。こう言う事を以前から聞いておりますが、科学は人間を物として扱う、こゝが問題なのであります。今日のお医者さんはやはり人間を物として取扱うと言うのが多いのであります。殊に外科なんかさうでありましょう。外科の手術をするのに涙を流しては出来や

満足させられるのである」と言う事を云うのであります。それから、つまりお医者さんで病氣をこまかに分けて、それに対する治療を考え実行するばかりでなく、今度は心を治すという事をして、おしまいは香を合せて、これは心を静めるのであります。そして仏を供養する。「こう言う事を自分は知つてやつているだけでその他の事は自分にはわからぬ」と他の善知識と同じようにこの長者も云うのであります。

甘露火王と臼杵先生

そして善財は又別れて次の善知識を訪ねてまいりますのであります。ところが次の善知識は又南の方であります。南の方に大きな都がある、多羅懂という都があり、そのお城に王様があつて、甘露火王という。この王様の所へ行つて菩薩の行を尋ねよという事を教えられて行くのであります。

この甘露火王の事は広島におりました頃、余程前の事で昭和十何年かの頃であつたかと記憶致しますが、皆さん御存じないかも知れませんが、臼杵祖山先生という方からこの甘露火王の事を最初に承つたのであります。臼杵祖山先生は前にも申しましたかも知れませんが、これは世に隠れた非常に立派なお坊さんでありまして、この方は大分県の宇佐八幡の近所のお寺の出身の方であります。よきお師匠つかにれて仏道を学んだ後には法隆寺で修業をなされた

しない。大根でも切るような心持でやらぬと出来ない。成程そうかも知れませんが。それは手術の時にはそういう心得が必要でありませうけれど、併し医者としての全体の心持ではやつぱり人間は物として取扱うのではないと思ふのであります。そうでありますから御経にこう言う事が言つてあるのは、やつぱり本当だと思ふのであります。こう言う所から日本でも古い時代、と言つてもついで明治に入つてからも「医は仁術」と言う事が言われたものであります。今はどうもそう言う事を言われない状態になつておるようであります。これは甚だ残念な事でありましてやつぱり医は仁術、手術の時には物として取扱つてもそれがいゝかも知れませんが、全体としては人間を人間として観るといふような仁の心を以てなさるのが、お医者さんとしても本当の心持じやないかとよく思いますのであります。

そしてこの長者の場合は、そういう風にして菩提心をおこさしめる、最後には無上菩提心をおこさしめる。そして色々の波羅蜜、六波羅蜜という菩薩の修業、例の布施・持戒・精進・禅定・智慧、そう言う修行を勧め讃える。こう言う事を言つて、「自分は最後に一切の香をいゝ工合に合せる事を知つてゐる。そしてその香りを以つて供養をする、普く諸仏供養をする。そこまで行く」と自分の願いが皆

方であります。その法隆寺での修行時代の臼杵先生の生活というものが、まあ非常に物質的にお困りになつて、ある時代には三度三度蕎麦の粉ばかりで過ぎた。それだから他のお弟子達はあの体は特別の体で蕎麦ばかりで榮養が十分らしいと言つて感心していたさうであります。併しあとで法隆寺で聞きますと、蕎麦の中に味噌を入れたり、野菜を入れたりしておられたという事を聞きました。こういう事をして法隆寺で佐伯定胤下第一の御弟子さんであつたのであります。佐伯定胤下第一の御弟子さんであつたやうであります。この臼杵先生に私が御縁がありまして、広島時代に前後二十年ばかりお育てを受けたのであります。何時も申しますが私の仏法を御聞かせ頂いた第一の善知識が近角常観先生で第二の善知識が臼杵祖山先生であります。このお二人の御様子なり態度なり違ふのであります。近角先生の方は信仰のお父さんのような気がしたのであります。時々私はお叱りを受けたのであります。それから臼杵先生の方は、信仰の御導きの上ではお母さんのように感じていたのであります。さうでありますから元来私は甘えつ子でありますから臼杵先生には根限り甘えたものであります。先生が大分県の中津にいらつしやつた頃であります。仏法の話は聞かないで夕方先生のお宅でお酒を頂いて、勝手な事を歌うてみたり、それから田甫の方へ

出て行つて椅子を並べて秋の月を眺めると言うような事を
して、仏法の事はちつともお尋ねしないと言うような事を
やる、白杵先生はやつぱり私に合せて下さったのでありま
す。私が五十一才の時にチブスで死ぬか生きるかで二ヶ月
ばかり伝染病院にはいつて居りましたが、その時に色々
の方からお見舞を頂きまして、私の家内が申しますのに、
色々の方のお見舞みんな有難いけれど非常な優しい柔かな
心持でお見舞下さつたのは白杵先生であると感ずると云う
ような事を申し上げました。法隆寺に行つて他のお弟子
さん達の話を聞きましても白杵先生はそうめんがお好きで
たまに我々が懇親会のような事をやるとそうめんを洗つ
て、それから先生が色々詩吟を聞かせて下さつたもので
あると。成る程私が広島時代に先生の六十一のお祝をした
事があります。五・六十人集つて夕方晩餐会がありました
その時に、平野覚性かくしやうさんと言うお坊さんが白杵先生の直
ぐ隣に坐つておられまして、自分は白杵先生のどんな所
も知つてゐる、白杵先生は色んな面白い歌をお歌いになる
からなどという事を言い続けておりましたら、白杵先生と
うとう、たとえば東京の上野公園をなぐれ書生が胡弓で
も弾きながら歌うような歌を、文句はおほえておりませ
んが、歌つてお聞かせになつた。そう言う事もあるのであり
ます。だから私なんかは白杵先生はお母さんのような気持

四十華嚴経を開いて甘露火王の国という処を読み始めまし
た。それから何度かそう詳しくは読んでおりませんけれど
も、大体の肝心な処を何度か繰り返し読んでおりました、
今度も何度目でありませうか、又読ませて頂きますのであり
ます。そういう因縁がありますから、甘露火王の国の事を
少し詳しく申上げて見たいと思つております。

甘露火王の徳

善財童子は今の普眼ふがんという長者によく御礼を申して、一
心に善知識を慕い求める心持でそこを別れて、甘露火王の
所へまいりますのでありますが、その王の所へまいります
途中に、善財がどういふ心持でまいりましたかと申しま
すと、先ず淨信心じやうしん、清らかな信心を持って、次にはまことの
道を欣ぶ心よろこぶこころを持って、それから暢び暢びとした怡しい心持
で、それからすなおな心持で、併し又勇み進むという心持
で静かに落ち着いた心持で、広々とした大きな心持で、
それから厳かな心持で、執着をしない心持で、何物にも碍
げられない無碍という心持で、それから道を我が身に体得
するといふような心持で、それから自由自在な心持で、又常
に心を妨かせるといふような心持で、それから道の師匠と
なりたいたいといふ心持でありませうか、それから物事を善
く巧みに分別するといふ心持、普くあらゆる修行をするとい
ふ心持、それからよくお尋ねをしてまことの道を理解す

がしていたのであります。併しその白杵先生がこの甘露火
王のお話を広島でなさつた時私も聞きました、非常に感
激したのであります。

と云うのは、甘露火王の国というの、これからお話し
ます仏教の御教の上に出て来る理想の国の有様をこまかに
国王の生活人民の有様を写し出してあります。仏教に於け
る理想の国なのであります。そういう四十華嚴経に説いて
ある理想の国というものがこの地球上に於いて何処にある
か。白杵先生はそれはその通りにはなつていないか知れな
いけれど、日本の国、神武天皇が国をお肇はじめになつてこ
の方二千何百年の日本の国というものは、この甘露火王の
国として描かれてゐる国に丁度肝心な処が似てゐる。そし
て仏法を始めて本當の意味で日本にお入れ下さつたのは聖
徳太子だから、お釈迦様が甘露火王の国としてお説き遣
しておおきになつた理想の国というものが、神武天皇によ
つて始められていた。それが聖徳太子によつて仏法を入れ
られ、それがこの日本の国に於いて一切の上に踰われて
来るよふになつた。それだから白杵先生としては「三聖を
仰ぎ奉りて」と云うのは、釈尊・神武天皇・聖徳太子、こ
のお三人の聖と仰ぎ奉る方の關係がその通りになる、と
言うお話を余程熱を持つてお話になつたのであります。そ
の時余程私感激致しましたものでありますから、それから

と云う心持、それから遍くあまね仏様の国に行くといふ心持、
それから仏様の莊嚴を見る、それから常に仏様を離れな
い、そして十方世界に求めて行く心持、それから一筋に進
んで決して退かない、そういう心持で段々甘露火王の国に
近付いて行くのであります。

そうすると最初にこの国に於いて有名なバラモン、バラ
モンとはよく修行した人を言うのであります。よくもの
解つたバラモンが善財に甘露火王の事を物語る、こう云う
事になつておるのであります。

甘露火王に就いては先ず第一に一体甘露火と云うのは何
か。「悪人を罰する事烈火の如く、善人を攝おさめ容るること
甘露の如し」と述べてありますが、白杵先生は其処をもう
少し解釈なさいます、甘露と云うのが慈悲である。火と
云うのが智慧である。甘露火と云うのは慈悲と智慧とが十
分に具そなつた王様であるとお説き下さいました。

これから先ず甘露火王の徳を述べないのでありますが、先
ず第一にこの王様は七支、七つの大事な事を具えておられ
ます。その七つと云うのは第一番は王様としての徳があつ
て天下の人がこの王様を仰いで戴く事は丁度首の如くにて
ある第二は輔佐の臣があつて左右の忠良の臣が王様を佐け
てゐる様が人間の両方の臂うでにたとえられる。第三には
其の国境があつて広く豊かに包み容れてゐるといふ国だ。

それは人間の体で腹に譬えられる。こう言うのである。第四險固なまもりがあつて、あらゆる方面を締め括つていゝる、それを人間の臍に譬える、こう言つてあります。第五には蔵があつて財産も食糧も十分に蓄えられてある、行くところとして少しも難儀なことがない、それは人間の臍に譬えてあります。第六には軍隊の威勢がある。その兵隊はなかなか立派であつて、それを治める事も動かす事も自由である。それを人間の脛に譬えてある。それから第七には隣国があつて、時を定めて貢物を持つて来て王の命令のままに行き来をする事、これが人の足に譬えてあります。この七つを保つて行くには武勇と智謀の二つによつてゐる。この七支二法によつて挙国一致一心同体という姿になつてゐる。

その次には甘露火王は九つの法を成就して王の道を広める。第一には徳によつて其の隣の国々を服させる。そして自分は真理を以つて自分の務めを行う。第二には隣国からの貢物はいつて来ない時には恩を以て感ぜしめる。貢物と言ふことばをつかつてありますが、私考えますに今の言葉で言へば貿易をやるといふ風に解釈すればよくはないかと思ひます。それで第三にはそれを感じしめようとしても従わない時にはその君臣に説いて疑う心が無いようにする。疑つてゐるような時にはです。その君臣に説いて疑う

うにするという事らしいのであります。

その次に王の内徳と外徳、内なる徳と外なる徳であります。それが説かれてあります。外なる徳というのは、今述べた七支九法というのがそれで、内徳というのが非常に大事なところであります。この種族が真に正しく、仁と智慧が深く、又外徳というのは種族が尊く勝れて嫡子相続で歴代相伝という事でありまして、ここを白杵先生力を籠めて説いて下さつたのであります。つまり日本の言葉になおせば、王の血筋が万世一系、嫡子相続という事になる。こういう処が丁度日本の国にあうのじやないかという事を先生熱心におつしやいましたのであります。

それから今度は王の胎内にある時からの事が述べてあります。受胎の時にも、妊娠中にも諸天のお守りがある。そして誕生されて以後、その王の位を受ける時まで幸福ないゝ事が重つて万国は喜び楽しむ。そしてその聖徳は毎日毎日に進み上つて、広く物事を聞いておいてになり、よく記憶しておいてになる。情深く智慧があり、親には孝、兄弟には仲が良い。こういう有様であつて態度は恭々しく慈み恵みが深い。やわらかであり聰明であつて、慚愧の心がある、自分を愧じるという心を持つておられる。又苦しい事を辛抱しつゝ忍辱の心があつて、あわてもせず乱暴もしない。尊く賢く徳を重んじ、一般人民を愍まれる。それか

心をなくさせる。第四にはそんなにしても向うが心を改めない時は、その君臣の間違つてゐる所を説き聞かせて和合させ、そして帰服させる。つまり外交的に平和を求めて行くと言ふような事でありまして、第五には説いても聞かない時は王の軍隊が討伐をする。第六にはそういう場合にはその軍を統率する大將に徳が有るか無いかをよく見る。第七にはその大將になる者の徳を審かに知つて、その城を守る事が出来るかどうか議る。第八には敵の方の堅い城を知つて、兵の強弱を料る。第九には自分の国の中の人の和と兵の鋭さををはかる。

甘露火王はこの九つの法を具えて、智慧の眼が常に一切を明らかに照して、八方の極めて遠い果まで正しい王化に自然に従つて長く変る事のないようにする。丁度沢山の川の流れが海に入るように異つた心が無いようにする。即ち王は大菩薩のようである。人間に現われて多くの人々を育ててもろもろの衆生心、人民の有様を皆知つてゐる。そして段々にこれを整えて服せしめ、先ず王法を伝えてその身を潤し結局はその心を解脱させる。だから甘露火王は平和の内に聖の教化を行う大王である。そこで今軍隊を動かすという事が出ておりますけれども、所謂戦争主義ではない。軍隊を動かすけれども敵と味方が戦つて血を流し命を失うという処まで行かぬようにして本當の平和を保つよ

ら自分の財産については常に足る事を知つて、他人の危難は常に救い護つて、耳や目やその他の感覚を差し控えて、我儘の心をほしいままにしない、弁舌は無碍自在で獅子吼し、言葉を駆使する事は誠実で愛欲とか瞋恚とかの心を離れて、而もよく世間の特殊の音声、違つた議論を了解されるというのであります。

昭和三十四年六月七日夜 講話。

花祭の歌

井上賢順作

大和島根にさき出でし 花のさまざまつみそえて

今し粧飾える花御堂、 立たす佛の尊さよ

あわれ三千年その昔、 天と地とをゆびざして

『我ぞこの世を救うべき尊き聖』と生れましぬ

時は春なり、地は王土、此処に御教いや栄え
花もわらいて鳥うたう、今日の御祭みな祝え

信謗共に因となつて

花田正夫

親鸞聖人の常の仰せに

「信謗共に因となつて、同じく往生浄土の縁を成す」

とあります。信ずる者も、謗る者も、それがもととなつて、仏徳に包容せられ、やがて転悪成徳せられて、皆同じく浄土に生れる、との意味であります。

さて聖人は常に私なき御心から、仰言ることには必ず根拠がありまして、地の底から生えた岩磐の趣があります。が、この常持語も、流れをたづねますと、先ず源信僧都の『往生要集』があげられます。

この『要集』は、母君と念仏裡のお別れをせられた翌年、僧都四十三歳の作であります。身に獲られた念仏の大道が母君の臨終にあざやかに実証せられて、今生夢のうちがちぎりがそのままに、来生さとのまへの御縁に転じられたのであります。僧都の胸にあふれてやまぬ悲喜の涙は、やがて一切の人々に往生浄土の道を勧められずにはいられなかつたのであります。かくて、経文、論釈の中から

要文をひろい集めて、「濁世、末代の目足」として念仏の一門を勧めて下さつた宝典であります。その巻末に、

「集めたのは皆正しい要文であるが、その間に私の詞がある。然しこれも仏意を仰いで述べたものであるが、なお謬りがあるかも知れぬ、その時は取捨して正理に順うようにして下さい。もしそれでも謗をうけるかもしれないが、それはあえて辞するところではありません」と述べられ、次に

「華嚴經の偈に『菩薩が種々の行を修行するのを見て、或は善、或は不善の心を起すことがあつても、菩薩はそれらを一切摂取して、同化してしまふ』とある。それだから、たとい謗をうけようとも、それがかえつて縁を結ぶことになるのであります。」

と。又僧都が大宋国の周文徳に、この『要集』を贈られた時の申状にも、

「たとい誹謗の者があつても、たとい讃歎の者があつて

も、あわせて我等と共に、極楽に往生するの縁を結びたいものである」と、書き添えてられます。

僧都のこの御言葉につれて、僧都の行実として思い出されますことは、僧都はお部屋に何時も「名利」の二字を掲げてそれを礼拝して居られたというのであります。或時「どうしてそうされますか」とおたずねすると「自分は初め名聞利養のために学問をしていたが、それが御縁となつて真実の道に引き入れられたので、いわば名利のおかげである」と答えられたとあります。

考えて見ればおそろしいことでもあります。名利のための修行は、自分の煩惱を満足さすために、仏陀の生き血をしやぶることでもあります。そうした者は当然地獄におちて行くべきでありますのに、不思議にもそれがもとなつて仏のまことの光に照らされ、導き入れられ、自分の愚かさ、仏心のきわみないことが知らされたとの仰せであります。ここに「信、謗ともに因となりて……」と述べられた僧都は、御自身が謗法者であるとの懺悔と、その者がかく救われて行くというお喜びがあつたと思われまふ。

第二番目に、聖人の規処とされたのが、聖覚法印の『唯信鈔』であります。本抄は法然上人御入滅後十年、承久の乱のおさまるかおさまらぬかの時の御作であり、時に法印

は五十五歳でありましたが、聖人は関東に居られたので、九年後に親しく書写せられました。其後御帰洛になつても度々書写せられて関東の同朋にねんごろに勧めていられますし、「唯信鈔文意」を八十五歳の頃に作られて、田舎の人々に懇切にお勧めになつて居られます。

本抄は、法然上人の『選択集』を心読、体解せられた法印が、上人御滅後、ようやく種々の異義やら論争がおこるにつけ、『選択集』の玄意を言葉をやわらげ、要文を抜かれて、一切の人々の法乳として、正しく述べられ、あわせて異解を訂された妙典であります。さて本抄の結文に、「念仏の要義は沢山あるけれども、大略述べ終つた。この書を見る人がさだめてあざけることであらうけれど、然しながら、信ずる者も、謗るものも、それがもとなつてみなともに浄土に生れる御縁となるであらう。」とあります。

聖覚法印がこのように書きとめられてありますのは、もとより、源信僧都に同心せられての上であります。法印の記になる『源空上人伝』に、次のことがあげてあります、上人遠流の際に、

「今の別れはしばらくの悲しみで春の夜の夢のようなものである。信謗共に縁として、先に生れて後を導きたいものである。……」

と仰せられたとあります。して見れば上人も亦「信謗共に因となりて云々」を常に信味していられたことがうかがわれるのであります。

又上人の御流罪の前後に、或は順縁により念仏門に入り、又は逆縁によつて縁が結ばれる有様を法印が讃えて「権化の方の善巧というものは、凡人の智慧でははかり

難いものである。信謗共に縁を結ばれ、違順ともに利益を蒙る。上人が配所におもむかれると、京の都は闇に燈火が消えたと同様であるが、御流謗の辺地は盲人の眼が開いたように明るくなる。かくて都は悲しみにとざされ、田舎は喜びがあふれる。そこで悲しむにつけ念仏を申し、喜ぶにつけても名号を称えて、悲喜ともに念仏往生の御縁になる」とあります。

更に、法印の御身辺で申せば、叔父にあたられる高野の明遍僧都は『選択集』を読まれて、偏執があるとて、反駁論を書かれていた時、「法然の勧める念仏は、重病人の何一つ消化する力もない者を救うためのお粥の念仏である」と夢に感得せられて、大いに慚愧せられられて、からはひとすちに念仏門に帰し給うたのであります。

又、後鳥羽上皇は、南都、北嶺の仏法者流の訴えを容れて念仏者の死罪、流罪の宣旨を下されたのであります。それから十年も経たぬうちに、承久の乱とあり、遂に隠岐

あります。

おわりに、聖人の仰せを、直接私共の上に仰ぎましよう。「信謗共に……」とは何という广大無辺な大徳力でありましようか。

わが身を省みますのに、一体何が真実、たやら、何が虚仮だやら、全く見分ける力がありません。ただ自己中心に、心にながすと喜び迎え、反すると疑い謗るといふ、妄動に明け暮れて居ります。

かゝる私共が救われるには、この私の全体を知りつくされて、一切を包容し、何処までも同化同融して一味の潮に転じて下さる大徳力によるほかにありません。「信ずるものは天国に、信じない者は煉獄に」というさばきの世界では、私如き者は、救いの縁が切れるのであります。

正信偈私解 (十六)

——「教行信証」について——

白井成允

正信偈は、親鸞聖人の主著『教行信証』の行巻を結べる六十行百二十句の偈文である。

の島に遠流の身となられました。然しそれによつて上皇は念仏門に深く帰依せられて、法印にも使いを立てて教をうけられるといういちぢるしい事もありました。

こうした事実を眼のあたりに沢山見聞せられた法印の『唯信鈔』の結びに「信謗共に云々」の悲願があらわれ、またの当然のことでありましよう。

親鸞聖人は、『教行信証』の終りに

「真宗の大切な法文をぬき書きし、浄土の教の要をひろい書きをしたが、これは唯々仏恩の深いことを念じての上で別に他意はない、定めて人々のあざけりをまねくことであるが、それも覚悟の上からである。もしこの書を見聞して、信順する者があればそれが因になり、疑い謗る者があればそれが縁となつて、広大な本願力におさめられて、やがて信心の花が開き、浄土に生れて美しきとりのを得るであらう」

と述べられ、前記の『華嚴経』の偈、
「菩薩が種々の修行をするのを見て、或はほめ、或はそしめるが、菩薩は皆それらを摂取する」
を引かれて総結としていられます。

そして御晩年におよばれて「信謗共に因となりて……」と、繰り返し／＼申されたのを近侍の人、如信上人や、唯円房達が聞きとられて、覚如上人が特筆して下さつたので

昔から「虚に出でて実に戻る、うそから出たまこと」と申しますが、私自体、虚仮に終始している身に、佛の方から真実を注いで下され、結縁し、転成して下さることによつて、石瓦同様の身を黄金とかわえて下さるといふ、世にあり得べからざる不思議さが、思いもかけずあらわれて下さるのであります。

「善、不善の心をおこすも、菩薩は皆撰取す。」この大徳力に聖人もおさめられつゝ、その徳の不思議さをいよ／＼随喜讃仰されて、あとに生れる者への燈炬を高く掲げて下さつたのであります。

燈火を高くかかげてわが前を 行く人のあり
小夜中のみち 甲斐和里子女史詠
春彼岸の終りの日稿す。

『教行信証』は、聖人の身に証したまうた信心の由来と本質とを告白し。如来の本願を顕わし尊号を讃えて。以て

一切の衆生に成仏の道を開かしたまうた書である、其の内容は教・行・信・証・真仏土・化身土の六巻から成る。

教巻は、聖人の信心の根拠が『大無量寿経』の仏説に存することを告げる、釈迦牟尼仏の五十年に亙る説法教化は畢意して此の経を説かんと行なわれた、此の経の宗致は如来の本願を説くことに存し、此の経の躰は即ち仏の名号に存する。之を明かす此の経こそ実に如来の真実の教である。

行巻は、大行を明かす。大行とは則ち無碍光如来の名を称するのである、此の名即ち南無阿弥陀仏の名号は、如来の本願によりて成就せられ、諸仏によりて称讃せられ、以て衆生に廻施せらるるところであり、中に一切諸善の本・一切諸徳の本を撰め、之を受ける行者をして速やかに円かに如来の大覚を証せしめる無碍絶対の力である。いわゆる「大悲の願船に乗じて光明の広海に浮びぬれば至徳の風靜かにして衆禍の波転ず」というもの、是れ即ち此の行を受くる凡聖をして齊しく与からしめる妙境界である。如来の証したまえる真如法性の徳の故に然かるのである。

信巻は、大信を明かす。大信とは、大行を恵み施してくだされた如来の願心を開き信するのである。如来は何故に此の大行即念仏の行を衆生に恵み施したまうのであるか。衆生が罪惡深重煩惱熾盛にして如何なる教法を以てして

る。次に真仏土巻が来る、則ち真実の証の内容が更に具体的に仏身及び仏土の相に於いて示される。言わく、仏は則ち是れ不可思議光如来なり、土は亦是れ無量光明土なり。則ち遍く十方を尽くして一切の群生を撰め、一たび建立せられて永しえに変わることなき、光壽無量なり悲智円満なる仏の身上である。是れ如来の悲願の証成し建立するところ、真実の如来法爾の境なるが故に、即ち能く一切の群生を撰め、必ず化して大覚に至らしめるの作用を具えている。是れ如来の徳に帰したる衆生の永遠にして普遍なる還相の活動の源として如来の身土の徳を告げるのである。

然るに衆生の機類千差万別なるが故に、或は如来の世に在しますを知らざる者、或は如来の名号を聞こうとしない者、或は之を聞きながらも其の真意を解せずして之を自己の行業の賜とする者等、甚だ多く、真実に如来の悲願を聞き得る者は極めて稀である。随つて涅槃常樂の果を証する者は少く、三界に流転する者は多い。此に於いて、此の多数の者を如何にして能く彼の稀なる大覚の土に撰め入れしめたまうか是れ如来の一子地から必然に発る問題でなければならぬ。而して之に答えるのが最後の方便化身土文類の巻である。則ち此の巻に於いて、如来の悲願を信せず真実の仏土に生まるるを知らざる一切の群生をして必ず之

も三界に流転するより他に在り得ない事を、如来かねてより明らかにみそなわして悲しみ慍れみたまうたからである。此の如き五逆謗法の者を必ず救いて正覚の道を歩ましめんと誓いたたせたまうた如来の悲願を信するところに、如来の名号を称する大行は湧き出でる。即ち信はれ行の源泉、行はれ信の等流、此の信行全く是れ如来の悲願の作用であり、以て衆生をして迷界（穢土）より悟界（浄土）に往生せしめる。是故に此の大信と大行と共に往相の廻向といわれる。

証巻は、この往相の廻向によれる信行の証果を明かす。証果は即ち現に正定聚の位に入り、究竟して大涅槃の極致に至り、自ら他をして円かに涅槃せしむる清淨無碍の大活動を為すの位である。煩惱成就の凡夫が此の大覚の位に入り得ること。偏に如来の大悲の願力の廻向に因るのであるが、入り得た暁には即ち直に復び生死の境に還りて利他の大行に出でる。その出でるのも同じく如来大悲の願力の廻向に因るのであつて、他に因るのではない。則ち入るも出するも、浄土に往くも穢土に還りて此を淨むるも、始終すべて是れ如来の廻向せしめたまう徳の作用である。言わく、弥陀如来は如より来り生まれて報應化種々の身を示現したまうと。此の証巻は則ち如来の廻向に因る往相極まりて還相に移る、往還無窮の活動の源を明かす文である。信じて能く彼土に生まれしむべき、如来の善巧方便が明かされる。是れ即ち如来の真実が其自を貫徹し遂行する所以の要道であり衆生の各別の機類にに応じて之を涅槃に誘引するための必須極要の方途である。之によつて此処にあらゆる外道邪偽に迷う者・牢く聖道自力に執する者・仏名を称念しながら之を自の功德善根として修めんとする者等、諸の機類が分折せられ、其等の行業が批判せられ、すべて自力我執の無明が転せられて如来の願力に帰せしめられるところに真実の道が存することが示され、之によつて替く万機を救う誓願一仏乗が顕わされる。

此の化身土巻は『教行信証』六巻を結ぶ巻であるが、其の結文には、著者親鸞聖人が此の六巻の書を著わすに至つた由来の縁を述べ、先師法然聖人に値いまつり賜わりまつれる不可思議の厚恩を記し、悲喜の涙を抑えつつ次の如くに筆を描いておられる。言わく「慶ばしいかな、心を弘誓の仏地に樹て、念を難思の法海に流す、深く如来の矜哀を知り、良に師教の恩厚を仰ぐ、慶喜いよいよ至り、至孝いよいよ重し、茲によりて真宗の要を鈔し浄土の要を披り、唯仏恩の深きことを念うて人倫の嘲を恥じず、若し斯の書を見聞せん者は、信順を因と爲し、疑謗を縁と爲して、信樂を願力に彰わし、妙果を安養に顕わさん。

安樂集に言わく、真言を採り集めて往益を助修せしむ、何となれば、前に生まれん者は後を導き、後に生まれん者は前を訪い、連続無窮にして、願わくは休止せざらめんと欲す、無辺の生死悔を尽くさんが為の故なりと。

爾れば、末代の道俗、仰いで信敬すべきなり、知る可し。

華嚴經の偈に言うが如し、若し菩薩種々の行を修行するを見て善不善の心を起すこと有りとも、菩薩皆撰取すと。

此の文を以て『教行信証』は結ばれている、そして此の文は聖人が此の六巻の書を編まれた根本の御精神を直に語つておられる、のみならず、此の文はそのまま正信偈を造りたまうた御精神を示しておられると思われる、其故に今此に掲げまいらせたのである。

ところで『教行信証』については更に次の一事を省みなければならぬ。

此の書は具には『願浄土真実教行証文類』と名づけられている。其の「願浄土真実」の五字及び「文類」の二字は、此の書の前五巻の名の題名に等しく具えられてあり、唯第六巻のみは「願浄土方便化身土文類」と名づけられてあるが、其の「方便」は即ち真実への方途或は要路として

真実の中に撰められる性質のものであるから、此の化身土巻は前の真仏土巻の派出であり、又真実の仏身仏土は即ち真実の証の内容であるから真仏土巻は証巻に撰められ得べく、更に信は行の信として信巻が行巻の中に撰められ得べきであるから、今これから六巻を挙げて「浄土の真実の教行証を願わす文類」と称することになつたのであろう。

然るに此に浄土というのは浄土門をいう、即ち聖道門に對していう。蓋し仏法を学ぶのは究竟して仏の覺に生きようとである。然るに此の事、親鸞聖人にとりては、聖道門に於いて能くし得ず唯浄土門に於いてのみ能くし得るところである。是れ我が身が本より煩惱成就の者なるが故に何れの行を修めようとも能く仏の覺に至るべくもないのに、仏かねてしろしめして為に浄土の門を開きたまうたのに因るからである。則ち曾て真実のあることなき我が身が唯如来の真実そのものに撰められて茲に能く真実なるを得しめられる、是浄土門の宗旨である。即ち真実は唯如来に在り、その如来の真実が虚仮不実なる我が身に貫き流れるところに浄土門の真実が顕われる、その真実によりて三界流転の身が永劫に仏の大覺に生かしめられる。微塵の虚偽にも眼を閉ざし得ず、ひたすら真実を求めて止み得なかつた若き日の祖聖は、はしなくも法然上人の教を聞いて浄土門の真実に撰められ安らわしめられた。

如来の大悲の願心から流れ出たこの真実そのものの流行を親鸞聖人は、恩師法然上人に於いて感得し、随つて恩師の教の旨趣を自ら深く内に味わうと与に更に弘く世に明らかにせざるを得ず、為に遡りてこの如来の真実を願わし伝えたまうた釈迦牟尼仏の經文と及び之を述べ明かしまつた諸の高僧等の論積の文とを遍く尋ね深く探り、之を聖人自身の信験の反省思惟に従い、類に分ちつつ首尾一体に組織するところに、此の「浄土の真実を願わす文」の教行信証等の諸類の編集が成されたのである。而も此の如き組織に於いて諸文の編集の成される事の志願及び意図は元仁元年即ち法然上人十三回忌の記念に於いて建てられたものと思はれること既に述べたる如くである。

釈迦牟尼の經多きが中に直に浄上の真実を願わしたるは大無量壽經である。是れ「經卷」に言う所である。此の經は如来の悲願を明かし、其の因（發起）果（成就）の始終を説きたまう。此を貫くもの即ち悲願の真実であり、此の真義が衆生に廻向せられ信受せられるところに煩惱の解脱がある。随つて衆生の解脱は唯如来の悲願の廻向に因る。故に浄土真実の行も信も果も又方便さえも総て是れ既に如来の悲願の中に誓い現わされてある。即ち六巻各の文類は此の願文を源として流れ出でたるものとして組織せら

れた。即ち真実教文類が大無量壽經を真実之教浄土真宗と標したるに因りて、真実行文類は其の第十七諸仏称名之願から、真実信文類は第十八至心信樂之願から、真実証文類は第十一必至滅度之願から、真仏土文類は第十二光明無量之願及び十三壽命無量之願から、而して方便化身土文類も亦同じく其の第十九至心発願之願及び第二十至心廻向之願から発し、之に因りて衆生のあらゆる機類を一一洩らすところ無く如来の真実に撰めて解脱せしめたまう浄土門の真義が語り盡くされたのである。

中に就いて浄土真実の宗旨の体験は特に行信二巻に於いて詳かに語られ、而して今此の正信偈は行巻の終結に置かれ、直に信巻を開く位に在る、即ち教行信証六巻の中の中核的意義を帯びる偈文であることが其の位置からも思われる。其事は更に諸種の内容からも思われるけれども今之を挙げるを略する。唯此の偈文を開く前文を拝読すると、祖聖が「知恩報徳」の一念から之を作りたまうた御精神を偲びまつることが出来る事、及び其の文は上に掲げまいらせた全巻の後序の結文と相照応せられる事だけを記して今此の項を終る。

あとがき

花の四月、仏降誕の聖月を迎えました。

新入学の制服姿も溟溟として嬉しく、卒業生の新調の服装での通勤振りも清潔さを覚えます。実に、草木も人も、春光に嬉々として大行進がくりひろげられて居ります。

ねがわくば花の下にて我死なん、春きさらぎの望月^{もちつき}の頃と詠じた西行法師も偲ばれます。

どうか、本年に入りまして有縁の方、誌友等の計画がしきりに進みます。治田やす様中野景棟も亦。

散る桜、散る桜、のこる桜も散る桜。こうした方々の捨身の御苦勞によつて、先に生れて、おくれた私共を待つて、導いて下さることあります。

「今生夢のうちのちぎりをしるべとして、来生さとのりのまへのえにしを結ばんとたり。我おくれなば人に導かれ、われ先だたば人を導きて、世々に善友となり、生々に知識となりて、迷執をたたん」

との聖賢法師の仰せ通りに、夢の世に生れて、夢ならぬさとの御縁に、導きつ導かれつ、手を取りつ手を取られつして、世に迷いの闇が除かれる日まで、尽末来際かけ

ての白道の旅をたどらせて頂きました。南無阿弥陀仏。

「宿業論」は次回まで続きます。全体をよく読みかえて下さいませすように。

福島先生、白井先生の白色白光、青色青色の、淨華の香りを繞いて頂きました。「信誦共に因となつて」の聖人の常持語は、御読み下さる皆様お一人お一人の上にお味わい下さいまして、余香をお頒ち下さいませすようにと念じて居ります。

三瓶英師の原稿を頂きながら、五月号に記載させて頂くことに致しました。御諒承下さいませすように。

目出度さもちう位^{くら}なりおらが春

山の月花盗人をてらし給う

花の世を無官の孤鳴にけり

春からあんな小蝶の生れけり

春立つや愚の上にまた愚を重ね

苦の姿業や花が開けばひらくとて

俳諧詩 一茶

御案内

○毎月、第一、二、三、日曜日午後一時半。一道会館例会。

市電、新郊通り一丁目、下車、東入ル。

○毎月廿四日、午前午後、市内昭和区小椋町教西寺、法話会。

市電、御器所通り下車。

○四月二十七日、半田市、至信会。午前午後

「漁夫生涯竹竿」 一休禪師

定価 一部 二十円(送共)

半年 百二十円(送共)

一年 二百四十円(送共)

名古屋市南区新上町二ノ八八

編集・発行人 花田 正夫

名古屋市中種区千種町馬走二八

印刷 人 本田 政雄

名古屋市南区新上町二ノ八八

発行所 慈光社

振替口座名古屋一〇四七〇番